企画展

幕末本庄宿のおもてなし

～和宮宿泊の舞台裏～

展示資料翻刻

第2章

【史料一】比宮の通行

享保十六年亥五月五日

一御公方様江伏見宮様ゟ比宮様御入被為遊候

● 大納言様江御輿入之節、御小休被為仰付、相勤申候、其節御用掛リ御代官後藤庄左衛門様御手代衆三人御馳走罷出　御迎ニ御出被為遊候方、諏訪若狭守様、山岡五郎作様、其外御徒士目付衆、御小人目付衆、御徒士衆御出、其節　御輿ハ黒具ハ衆、御[　]被成候、絹黒羽織リニ而

（『田村本陣休泊控帳』）

【史料二】五十宮の通行

延享二年巳三月十七日

一京都閑院宮様ゟ五十宮様　御公方様

大納言様江御輿入之節、御小休御本陣、門外へ上下無腰ニ而罷出申候、野呂猪右衛門様御支配之時、御手代中田口武左衛門様、金井兼八様御出

一前之坪之内、新規雪隠壱ケ所

一御上之雪隠之樋箱新規、但シ畳共ニ

一上ケ畳弐畳表替

一井戸雨覆、釣新規

一御上之御手水桶ふた、柄杓共新規

一たはこ盆十五程入

一台子弐口入申候

一茶台十弐三

一茶碗五六十

一煙筒十五本余

一薬鑵五ツ程

一火鉢三ツ四ツ

一上段之裏并料理之間之角メ切

一御迎之御方様方二三拾日前ニ御登リ被遊候

一水野河内守様

一万歳三郎次郎様

神尾市左衛門様

細井佐次右衛門様

御徒士目付

御小人目付

与力道心衆

（『田村本陣休泊控帳』）

【史料三】有君の通行

天保弐辛卯年九月十一日

鷹司様御養女　　御旅館

有君様

御歳八歳ニ被為成候由

大納言様江御輿入

献上栗三升、但白木三方江載ホウシャウ紙敷

拝領金三百疋、御次江献上栗六升、拝領御細工物弐包、

内花園様・浜田様ヨリ壱包宛

右者御添番古川源右衛門様・御伊賀掛川藤左衛門様ゟ御内意ニ付、

御徒目付様江御伺之上献上ニ相成、翌朝御目録被下置候

一御賄大津御代官石原清左衛門様御引請ニ付、御手付、御手代様并下

働之衆五人程ニ而三ノ間、四ノ間其外御暦々様方御詰所江御膳御差

出被遊候、御本陣ゟ御膳者一向差出不申候

一家内之もの立除之積ニ候得共、子供斗身寄之方江遣し置、其外之もの

者膳棚之間江相詰居、御賄御手付、御手代様御差図を請、膳椀洗出し、

御飯取扱等いたし可申候

（後略）

（『田村本陣休泊控帳』）

第3章

【史料四】児玉に届いた桜田門外の変

（前略）

安政七申年三月三日朝五ツ時、掃部頭殿登城之節、外桜田御門外松平

市正門前ニ而狼藉もの壱人馬場先御門外御堀端にて倒死而、人八龍之口

御堀端ニ而首壱ツ持参之趣形ニハ白布にて鉢巻襷掛小具足着込居候由、

右同類御老中中務大輔殿宅江罷出、細川越中守屋敷江四人罷出、掃部

頭恨之筋有之、只今刃傷ニ及慥ニ印取置候、水戸殿家来何之誰与相名乗

申出候間、越中守江預ヶ右賄方之義者町奉行可被相談旨被仰渡候

（後略）

（福田家文書）

【史料五】御用提灯・御用旗

九月十二日大雨

御出役様方江先達而中ゟ金主之儀奉願上候様

御聞済ニ相成、明日ニも御呼出シ可有之様被　仰聞

右同日　福井様（朱）・兼地様ゟ被仰渡候、尤先達而中ゟ奉願上置候儀ニ御座

候、御下向御用提灯御免

御本陣

木屋共　江　御下向　表（朱）

大工共　御用　御本陣

仕事共　材木方

大工方
仕事師方
御賄方・御代官様ゟ御達書呼来御触留ニ記ス

御本陣并材木屋共江荷物送ひ之節、左之のぼり御免ニ成ル

御下向
御用
本庄宿
御本陣掛

右之通御免ニ相成候ニ付、木屋共外大工共江拵可申様申聞候処、一同大悦ニ御座候

（後略）

（「和宮様御下向御用留」）

【史料六】立入禁止の札

八月廿八日大安
今日吉日ニ付諸事始メ
表門内西ノ方塀際江御普請取建ル
間口八間
奥行九尺　壱ヶ所　勝手入口東ノ方江
間口四間
間口三間　奥行弐間　壱ヶ所
〆　三ヶ所

御普請小屋再々掛札致ス

御用御普請小屋場

御湯殿御普請小屋場

表裏門江

御普請中無用之者入べからす

何辺も六尺板

諸職人腰札

竪四寸従横弐寸程

表
○御本陣掛り

裏
○焼印　何掛　誰

御本陣江入置候諸職人共ハ
銘々鑑札所持いたし居候様
御出役様ゟ被　仰渡候間
右之通相認再願人数毎直ニ
相渡シタ刻引取之節札引上
職人者帳江相記し申候

（「和宮様御下向御用留」）

【史料七】借用証文

借用申金子証文之事

一　金百両也

右者

和宮様御下向ニ付、本陣左惣治宅　御旅館相成候ニ付、御上段向御修復其外新規御建立御普請御入用金之内江書面之通慥ニ借用申所実正ニ御座候、追而御下ケ金有之次第急度返済可致候、借用証文依而如件

本庄宿
本陣
借用人　左惣治　印
親類
三左衛門　印
宿役人惣代
問屋
伝右衛門　印
横瀬村
八郎左衛門殿

文久元酉年十月

前書之通相違無之候、以上

伊奈半左衛門手附
小嶋僖一郎　印

（「和宮様御下向御用留」）

【史料八】和宮の通行

文久元辛酉年十一月十一日

仁孝天皇皇女　御休泊割御触書留ニ記ス

和宮様　　御旅館

御歳拾六歳

上様江御輿入被遊候

献上桃弐升　但白木三方江載奉書紙敷

一献上之儀、此度者御上江斗献上仕候得共已来者弐通用意いたし御次江も献上可仕候、是ハ御番之頭様、御徒御目付御添番、御伊賀之内江奉願上、其上献上物差上可申、左ニ無之候得者容易ニ者御受納無御座候

（後略）

（『田村本陣休泊控帳』）

【史料九】和宮下向諸入用諸払帳

（前略）

小以
金六百四拾弐両壱分弐朱
残壱貫弐百八拾三文

外
金百六拾五両三歩弐朱
残八拾三貫七百五拾三文
是者去々酉年十二月中宿役人・百姓代一同相談之上村入用差加請払
候分

金弐百六拾六両弐分壱朱
残百九拾壱文
是者去々酉年十二月中宿役人・百姓代一同相談之上往還入用帳江差
加請払候分

金八百三両壱歩
是者当宿侍等様ゟ侍等迄延長千七百三拾間往還道普請金御手当と
して被下置候金六拾三両三歩引残銘々自普請仕候入用

右者去々酉年十一月中和宮様　御下向ニ付諸入用名主・問屋・年寄・組
頭・百姓代立会取調候処、書面之通相違無御座候ニ付、此度一同連印仕
差上申候、以上

当御支配所
中山道本庄宿

文久三亥年七月

百姓代
八左衛門㊞
（十八名略）
名主
問屋
森田市郎左衛門㊞
同
森田助左衛門㊞

伊奈半左衛門様
御役所

前書見置もの也
伊奈半左衛門
亥　役所㊞
七月二十六日

（市有文書）

【史料十】御当日御宿割帳

（左側）

一関東御取締三人　威徳院

一奥御小人　九人　米屋次兵衛

一御従頭

表使

使番

一　添番

伊賀

奥御小人

御下男

穀屋

次右衛門

新井や

宇三郎

左官

忠右衛門

諸井屋

太郎兵衛

一加納遠江守

安養院

かしや

勘蔵

若井（カ）

六右衛門

髪結

久蔵

新井屋

清吉

御右筆

御用人

御用部屋書役

同　六尺

油屋

藤吉

大野屋

伊助

一御旅館　御本陣

左惣治

一関出雲守組与力

宰組山科門士

御輿丁八瀬童

一御輿前後高張持

御衣■算奥人

御料　百姓

日光や

宮五郎

栄次郎

房吉

与惣吉

民蔵

長吉

丞吉

（右側）

一御翠廣御御奥

御脇方草々鍖取

■徳屋

安兵衛

一御勘定

御普請役

小松屋

清吉

一弐役与力弐人　仲屋

彦兵衛

一奥詰拾三人　日野屋

久兵衛

一同　山城屋
　庄左衛門
一　同　上田や
　亀蔵
一御下男八人　日野屋
　源助
一御迎女中下宿　たばこや
　角右衛門
一表使以下女中　森田屋
附添役々下宿　藤四郎
一同　若松屋
　安兵衛
一伊賀之者三拾壱人　大和や
　平蔵
一同　中野や
　長兵衛
一同　荻原
　長八
一加納遠江守下宿　商人
　儀兵衛

（田村家文書）

【史料十一】和宮下向における助郷免除願い

乍恐以書付奉歎願候

武州榛沢郡宮戸村名主・組頭・百姓代一同奉申上候、今般和宮様御下向二付中山道本庄宿江御印状御渡し相成奉拝見外村一同御請書奉差上候、然処村方之義者高百拾九石之村方二而従往古ゟ中山道小山川越立御用同郡岡村・岡下村・瀧瀬村・宮戸村四ヶ村二而相勤来川場御証文四ヶ村一紙二被下置罷在候村方二而渡船越立仮橋掛外シ其外共諸御用向四ヶ村二而相勤是迄御通輿之節ハ勿論大御通行之度々村中拾五才以上六拾才以下御用二相立候者不残罷立川場江相詰御用相勤今般之義ハ御出格御厳重之御触も有之猶以御大切之御用与奉存候、殊二新造弐艘打立仮橋新規掛替御幕揚補理両岸普請等多分之人足諸入用相嵩此上本庄宿当分助郷被　仰付候而者同日両御役儀難勤殊二四ヶ村一同と八乍申当岸八岡村・岡下村高九百七拾石之大村二而相勤北岸八瀧瀬村・宮戸村僅三百七拾石之小村二而相勤候得者宮戸村相除瀧瀬村一村二而迚茂相勤兼御差支八眼前之儀二而一同奉恐入必至与難渋難申尽、依之乍顧恐川場御証文写相添只頒（頻カ）二奉歎願候、何卒格別之以　御慈悲本庄宿当分助郷之義御免除被成下置小山川之場御用無御差支相勤候様被仰付度偏二奉願上候、右願之通被仰付被下置候ハヽ一同難有仕合二奉存候、以上

文久元年酉　九月　道中御奉行所御役人中様　宮戸村

（金井家文書）